白き綾(格助)のなよよかなる(形容詞・体)、紫苑色(しをん)など(副助)奉り(四・用)て(接助)、
こまやかなる(形容動詞・体) 御直衣、帯しどけなく(形容詞・用)うち乱れ(下二・用)給へ(補四・已)
る(存続「り」体)御さまに(断定「なり」用)て(接助)、「釈迦牟尼仏弟子(しゃかむにぶつでし)。」と(格助)名のり(四・用)て(接助)、
ゆるるかに(形容動詞・用)読み(四・用)給へ(補四・已)る(存続「り」体)、また世に(格助)知らず(四・未)聞こゆ(下二・終)。
沖より(格助)舟どもの(格助)歌ひののしりて(四・用)(接助)漕ぎ行く(四・体)など(副助)も(強意・係助)
聞こゆ(下二・終)。ほのかに、ただ小さき鳥の(格助)浮かべると(四・已)(接助)
見やらるるも(四・未)(自発「る」体)、心細げなるに(形容動詞・体)(接助)、雁の(格助)つらねて(下二・用)鳴く(四・体)
声、楫(かぢ)の音にまがへるを(四・已)(格助)、うちながめ(下二・用)給ひて(補四・用)(接助)、
涙のこぼるるを(下二・体)(格助)かき払ひ(四・用)給へる(補四・已)(存続「り」体)御手つき、黒き(形容詞・体)
御数珠に(格助)映え(下二・用)給へる(補四・已)(存続「り」体)は、ふるさとの(格助)女恋しき人々(形容詞・体)
の(格助)心、みな慰みに(四・用)(過去「けり」終)けり(完了「ぬ」用)。
初雁は恋しき人の(格助)つらなれ(断定「なり」已)や(疑問・係助)
旅の(格助)空飛ぶ(四・体)声の(格助)悲しき(形容詞・体)
と(格助)のたまへ(四・已)ば(接助)、良清、
かきつらね(下二・用)昔のこと(格助)ぞ(係助)思ほゆる(下二・体)
雁はその世の(格助)友ならね(断定「なり」未)ども(接助)
民部大輔、
心から(格助)常世を(格助)捨てて(下二・用)(接助)鳴く(四・体)雁を(格助)
雲のよそにも(格助)(係助)思ひける(四・用)(過去「けり」体)かな(詠嘆・終助)

白い綾織物の柔らかい下着の上に、紫苑色の指貫
などをお召しになって、
色の濃い御直衣に、帯がくつろいで乱れなさって
いる(光源氏の)お姿で、「釈迦牟尼仏弟子。」と
名のって、
ゆっくりとお経を読みなさっている(様子)が、
また他に比べるものがないほど美しく聞こえる。
沖の方をいくつもの船が大声で歌って漕いでいく
のも聞こえる。(船が遠く)ほのかに、ただ小さい
鳥が浮かんでいるように
見られるのも、心細そうに感じ、雁が連なって鳴
く声が、(舟を漕ぐ)楫の音に似ているのを、ぼん
やりと眺めなさって、
涙がこぼれるのをお拭いになりなさるお手つきが、
黒い数珠に映えていらっしゃるの(様子)には、
都の女性(妻など)を恋しく思う人々の
心が、みな紛れたのだった。
初雁は(都にいる)恋しい人の仲間なのだろうか
旅の空を飛ぶ声が悲しく聞こえてくることだよ
と(光源氏が)おっしゃったところ、良清が、
次々と昔のことが思い出されます
雁はその頃の友ではないけれども
民部大輔は、
自分からすすんで(故郷の)常世の国を捨てて
鳴く雁を
(私はこれまで)他人事だと思っていたことだよ

©高校古文No.1授業ノート　https://kobun.info/